

令和6年度 入学試験出題意図

教科・科目名	英語、ドイツ語、中国語、琉球語	問題番号	問題1、問題2
対象学部・ 学科・課程等	大学院芸術文化学研究科（比較芸術学・民族音楽学・芸術表現 各研究領域）		
出題意図	<p>芸術文化学研究科で研究をするために必要な基礎能力を問うとともに、理解した内容を現代日本語の文法や表現法に沿って論理的に表現する力を問うものである。</p> <p>問1は、美術史家エルンスト・ゴンブリッチ（1909-2001）の、西洋美術における空間把握についてのエッセイの、冒頭部分である。造形芸術について専門的に学ぶにあたり、ここで論じられた内容は、ごく常識的なことであり、そうした基礎教養として当然把握しておくべき内容を、英語論文の読解において理解しているかどうか、確認することが趣旨である。</p> <p>問2は、19世紀に活躍した女性ピアニスト、作曲家で、ロベルト・シューマンの妻クララ・シューマン（1819-96）の即興作品についての論文の冒頭部分である。専門分野に求められる単語や文章表現が頻出していることをふまえて、出題部分の翻訳により、芸術文化学に関する英語論文を読むための基礎力を問う。</p>		
教科・科目名	英語、ドイツ語、中国語、琉球語	問題番号	問題1
対象学部・ 学科・課程等	大学院芸術文化学研究科（比較芸術学・民族音楽学・芸術表現 各研究領域）		
出題意図	<p>芸術（美術）理論のアンソロジー、<i>Kunsttheorie im 20. Jahrhundert</i> <i>Künstlerschriften Kunstkritik Kunstphilosophie Manifeste Statements</i> <i>Interviews I 1895 - 1941.</i> (2003) から、編者が「近代」について概括した箇所である。学術的なドイツ語の文章を日本語に訳出することにより、博士課程で要求されるテキスト読解や論理的な訳文の構築などの力を見る。</p>		

令和6年度 入学試験出題意図

教科・科目名	英語、 ドイツ語 、中国語、琉球語	問題番号	問題2
対象学部・ 学科・課程等	大学院芸術文化学研究科（比較芸術学・民族音楽学・芸術表現 各研究領域）		
出題意図	<p>音楽学者の Martin Geck の著書『Die kürzeste Geschichte der Musik』（2020）からの抜粋で、中世以降の教会音楽、とりわけ多声音楽の初期の発展（モテット）について述べられた内容を独文和訳させる。書名から明らかなように、西洋音楽史の入門書として書かれたもので、ドイツ語も平易なものであるため、博士課程の入学後、文献講読を行う上で必要となる最低限のレベルのドイツ語の読解力を問うものである。初歩的な文法事項（非人称の es、関係代名詞、分離動詞など）が把握できているか。単語の意味を正確に捉えられているか。文法と意味をとらえて、各文を正確に理解できているか。意味の通る訳文を作成することができているか、などの観点から、受験者のドイツ語の読解力を判定する。</p>		
教科・科目名	英語、ドイツ語、 中国語 、琉球語	問題番号	問題1，問題2
対象学部・ 学科・課程等	大学院芸術文化学研究科（比較芸術学・民族音楽学・芸術表現 各研究領域）		
出題意図	<p>外国語の出題は、沖縄県立芸術大学芸術文化学研究科で研究するために必要な基礎的な能力を問うとともに、理解した内容を現代日本語の文法や表記法に沿って論理的に表現する力を問うものである。</p> <p>問題1の前近代の琉球および中国（清代）の漢文を適切に理解し、日本語に訳すことができるかを問う。出典は、課題文1は那覇市歴史博物館所蔵『球陽 卷之十二』（867号記事）、課題文2は陳龍貴主編『清代琉球史料彙編-其他檔冊(1)下』国立故宫博物院、2019年、34頁。</p> <p>問題2の中国と琉球に関する研究論文（繁体字）を適切に理解し、日本語に訳す、または要点をつかみ適切な日本語でまとめることができるかを問う。出典は、謝必振「中琉歴史関係研究的現状與思考」『第十二回琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集』沖縄県教育委員会、2020年、187-200頁。</p>		

令和6年度 入学試験出題意図

教科・科目名	英語、ドイツ語、中国語、 琉球語	問題番号	問題1, 問題2
対象学部・ 学科・課程等	大学院芸術文化学研究科（比較芸術学・民族音楽学・芸術表現 各研究領域）		
出題意図	<p>琉球語試験については、入学後、琉球文献などを読み、理解するために基礎となる琉球語能力が身についているかどうかを測定する。</p> <p>琉歌組踊語に用いられる琉球語は、多くの琉球文芸作品に通ずる基礎的な言語である。回答者の理解度で琉球語資料の読みと理解度を測ることができる。</p> <p>具体的には問題1と問題2の2問構成である。問題1は古文書講読である。明治以前の琉球関係資料の多くは未だに翻刻されていないものが多い。従って古文書講読のスキルは博士論文における琉球資料を活用する際に必須のものとなる。また、琉球文書内には候文体であっても名詞や一部語彙に琉球語が用いられることが多い。琉球語は平仮名で記載されることが多いため、平仮名の多い古文書を用いた。</p> <p>問題2は、南島歌謡の読み、通釈について基礎的な知識を問うものと、歌謡に用いられる言葉を理解していなければ解けない歌の構造（これは基本的なもの）、および解説を行う問題である。琉歌組踊語と時代区分の異なる（より古い）琉球語の読解能力を測る問題である。</p>		